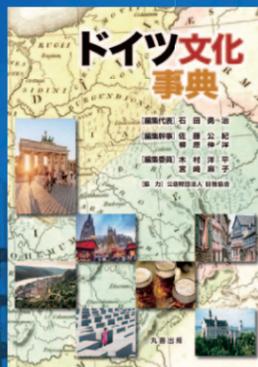


2020年10月刊行予定



# ドイツ文化事典



石田 勇治 編集代表

A5判・744頁 定価(本体20,000円+税) ISBN978-4-621-30564-5

ドイツと聞いてイメージするものといえば、ビールやソーセージなどの食文化、サッカーなどのスポーツ文化、女性運動や環境運動などの政治文化、美術や音楽またはルターやヒトラーなどの歴史上の人物かもしれない。また、文学といってもゲーテからファンタジー小説まで様々であろう。そこで本事典は、こうした多種多様なドイツ文化の局面を紹介しながら、その奥行きを深さをわかりやすく解説する。

◆ワンテーマ1見開き(2頁)完結でどこから開いても興味深く読める。

◆11の章(分野)を設けて体系的(時系列)な配列で300を超える魅力的な中項目を収録。

最新情報・詳細はこちらから丸善出版ホームページへ

東西ドイツ統一30年記念出版

# ドイツ文化事典

ドイツ文化の奥深さをわかりやすく解説

A5判・744頁 定価(本体20,000円+税)

ISBN978-4-621-30564-5

編集委員会

編集代表

石田 勇治

東京大学大学院総合文化研究科 教授

編集幹事

佐藤 公紀

明治大学法学部 専任講師

柳原 伸洋

東京女子大学現代教養学部 准教授

編集委員

木村 洋平

作家、エシカルSTORY代表/編集長

宮崎 麻子

大阪大学大学院言語文化研究科 准教授

協力

公益財団法人 日独協会

## 好評既刊 文化事典シリーズ



各 定価(本体20,000円+税)

スペイン文化事典

A5判・922頁 ISBN 978-4-621-08300-0

イタリア文化事典

A5判・934頁 ISBN 978-4-621-08429-8

フランス文化事典

A5判・798頁 ISBN 978-4-621-08522-6

イギリス文化事典

A5判・946頁 ISBN 978-4-621-08864-7

日本文化事典

A5判・814頁 ISBN 978-4-621-08979-8

中国文化事典

A5判・808頁 ISBN 978-4-621-30117-3

北欧文化事典

A5判・696頁 ISBN 978-4-621-30171-5

アメリカ文化事典

A5判・958頁 ISBN 978-4-621-30214-9

インド文化事典

A5判・806頁 ISBN 978-4-621-30235-4

東南アジア文化事典

A5判・826頁 ISBN 978-4-621-30390-0

ロシア文化事典

A5判・890頁 ISBN 978-4-621-30413-6

中東・オリエント文化事典 **新刊**

A5判・820頁 ISBN 978-4-621-30553-9

丸善出版株式会社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17 神田神保町ビル 書籍営業部 TEL(03)3512-3256 FAX(03)3512-3270 <https://www.maruzen-publishing.co.jp>

丸善出版株式会社行 FAX 03-3512-3270

注	ドイツ文化事典 定価(本体20,000円+税) ISBN978-4-621-30564-5	冊
		冊
文	お名前	
	ご住所 〒	
書	TEL	

※ご注文をいただいた個人情報は、書店、取次(流通)・弊社間で商品手配の目的に利用させていただきます。

tkp.20.A0



丸善出版



# 目次

## 第1章 「ドイツ」とドイツ語圏文化

「ドイツ」という名称 / 「オーストリア」という名称—ドイツと絡み合う千年史 / 「スイス」という名称 / ルクセンブルク / リヒテンシュタイン / ベルギーのドイツ語圏—プロイセン風に動き、フランス風に暮らす / ドイツ語 / ドイツ語協会 / ソルブ—しぶとく生き残ったスラヴ系の少数民族 / ドイツ語圏の「祭礼」—ドイツ語圏における「創られた伝統」 / ドイツの宗教 / 現代ドイツのプロテスタント / 現代ドイツのカトリック / ドイツの地形 / エルベ川—分かつつ、つなぐ、氾濫するも美しき川 / ドナウ川—色彩豊かに、時にためらぬ東方へ / 黒い森 / プロツケン山 / ベルリン / ウィーン / アルザス・ロレーヌ (エルザス・ロートリンゲン) / バイエルン / ミュンヘン—主な季節行事と人々の暮らし / ニュルンベルクと鉛筆—ステッドラー、ファーバー・カステルなど / ローテンブルク—メディアの中の「ドイツ中世の町」 / ドレスデン—多重的な歴史都市 / ドイツとドイツ語圏のクリスマス文化 / ドイツの動物保護 / ドイツの出版文化 / ドイツの保育事情 / アウトバーン—技術と大地への崇拜が結びついた「神話」 / 鉄道文化 / ジョパークの試み / ドイツの銀行・金融

## 第2章 歴史文化

ドイツのユダヤ人の歴史と文化 / スイス・アルプスをめぐる歴史—「通路」から「目的地」へ / ドイツ地域の古代 / ドイツ地域の中世 / 修道院 / ドイツの城 / ドイツ騎士団 (東方植民) / 神聖ローマ帝国—前近代ヨーロッパ史理解のカギ / フリードリヒ1世—キフホイザーのパルバロッサ / 皇帝フリードリヒ2世—交易ネットワークと学知文芸の再編者 / スイス盟約者団 / ハンザ同盟 / 金印勅書と選「帝」侯 / ペストの流行 / グーテンベルクと贖宥状—印刷術と宗教改革の「深い関係」 / 宗教改革の多様性 / 魔女が集う山—プロツケン山 / 三十年戦争 / プロイセンの歴史 / フリードリヒ大王—啓蒙絶対主義がもたらした国民性 / ハプスブルク家の隆盛と衰退 / トゥルン・ウント・タクシス / ハプスブルク帝国の複合国家論 / 革命と動乱の時代のドイツ—近代ドイツの始動 / ブラウゼヴィッツ—人間事象としての戦争をどう考えるのか / カスパー・ハウザー—バーデン王国継承者あるいは稀代の詐欺師か / 19世紀ドイツの市民社会 / 体操 / 歴史を背負った登山 / ドイツのサッカー / 1848年革命 / ドイツにおける騒擾 / 19世紀後半のドイツにおける工業化の進展 / オイレンブルク使節団と日本との邂逅 / ドイツ帝国の社会と文化—国民文化の形成の時代 / 政治文化としてのビスマルク / 第一次世界大戦下の社会と文化 / ワーデンホーフ・カレルギー—「ヨーロッパ統合の父」と日本 / ヴァイマル共和国 / ヒトラーとナチズム / 民族共同体と余暇—フォルクスワーゲンと歓喜力行団 / 第二次世界大戦下の社会状況・文化 / 白バラ / ハーケンクロイツ—ナチ・ドイツのシンボル / ホロコースト / ナチ体制下の医学と障害者の「安楽死」—「抑圧された過去」から継承すべき記憶へ / ドイツと空襲 / ドイツ人の東欧からの追放 / 占領期、そして東西ドイツの成立 / 東ドイツの社会と生活文化 / ベルリンの壁の建設と開放 / 学生運動—1960年代後半の抗議 / ドイツ統一—東ドイツの崩壊と西ドイツへの編入 / 過去の克服

## 第3章 政治文化

ドイツの議会制度 / ドイツの大統領 / キリスト教民主同盟 / ドイツ社会民主党 / 緑の党 / 左翼党 / ドイツのための選択政 / コラント・アデナウアー—西側結合と宰相民主主義 / ヴァリ・ブラント / ヘルムト・コール / アンゲラ・メルケル / ドイツの地方行政—その構造と功罪 / EUとドイツ— 繁栄と和解のためのヨーロッパ統合とその危機 / 連邦政治教育センター / 現代ドイツの市民社会 / ドイツの国境問題 / ドイツの国籍 / 難民・移民問題 / 学校教育と移民—公教育への問い直し / 原発—核兵器、環境問題、原子力帝国? / 平和運動 / 排外主義 / ドイツの妊娠中絶をめぐる論争 / ドイツのフェミニズム運動 / ドイツの結婚・離婚 / 少子化問題—よみがえるディストピア / ドイツのアナーキズム / 政治的・灰の水曜日 / 死刑制度 / 想起の政治文化 / ドイツ連邦軍と「過去の克服」 / ドイツの軍艦 / 現代オーストリアの政治システム / 現代スイスの政治システム

## 第4章 食文化

冷たい食事—ドイツ家庭の夕食事情 / 台所を愛する人々 / ドイツ農業の特色 / カフェ文化 / オーストリアの食文化 / スイスの食文化 / ジャガイモ / パン / ビール / ドイツワイン—温暖化と伝統回帰 / 居酒屋 / オウトバーフェスト / ソーセージ / 豚料理 / ドネルケバブ / ドイツのケーキ / シュトレッ / パウムクーヘン / ブミ (ハリボー) / オーガニック食品 (ピオ) / ドイツの珍しい料理と食材

## 第5章 ドイツ語圏文化と世界との関わり

鎖国の国を訪れたドイツ人—ケンペル、シーボルト / お雇い外国人 / 大使館 / ウィーン万博と日本 / 森鷗外とのドイツ滞在—医学と文学。二つの道の出発点 / 翻訳家としての森鷗外 / アジア・太平洋の中のドイツ植民地主義と文化・教育 / ドイツ領アフリカ / 戦間期ベルリンのロシア人コミュニティ—ナボコフ / 神戸とドイツ人—異人館の風見鶏 / アメリカに亡命した知識人 / ヴァルター・ベンヤミン—命と記憶 / フランクフルト学派 / 東ドイツに「帰国」した亡命者—ツ・ヴェ・マキシム・アメリカ / バウル・ツェラン—アウシュヴィッツ後の言葉の可能性を探求した詩人 / アドルフ・アイヒマン / ドイツ語圏の日本学 (Japanologie) / 21世紀ドイツの「日本文化」 / ドイツのマンガ文化 / 日独ユースネットワーク / 漫画家「24年組」の描いたドイツ

## 第6章 科学・学問

現代ドイツ語圏の大学 / ドイツの図書館 / 動物園—見世物になった動物と異文化 / ヨハネス・ケプラー / 博物館学 / フンボルトペンギン—アレクサンダー・フォン・フンボルトとの関係 / ドイツの教育学 / ドイツの数学史—数学王国ドイツの栄光と悲劇 / ロベルト・コッホと細菌学—微生物の狩人 / 物理学 / アインシュタイン / カメラ・光学 / 「更年期」—老いの医療化とジェンダー化 / ホームオパシー / ドイツ民俗学 / 構造芸術—アウトバーンとミュンヘン・オリンピックスタジアムに通底する設計哲学 / 環境教育 / ギムナジウム / DAAD (ドイツ学術交流会)

## 第7章 文学

ニーベルンゲン—ドイツの過去と現在を結ぶ英雄譚 / グリム童話とその受容 / 教養小説とゲーテ / 近代小説の誕生 / 文字と文学—手書きから活字へ / ロマン派の自然観と芸術観 / ハイネと「ローレイ」 / もじゃもじゃペーター—しつけの絵本? / リアリズム文学と家族制度—テオドーア・フォンターネのベルリン社会小説 / スイス文学—「多様性の中の統一」というアポリリア / 世紀転換期のウィーン / カフカとプラハ / 大都市の発展と文学—ヴァイマル共和国時代のベルリン / ヘッセとリルケ—なぜ日本で人気か / トーマス・マンとヴァイマル共和国 / 同性愛と文学—トーマス・マン「ヴェニスに死す」 / 東欧のドイツ語文学 / 東ドイツ建国と文学—政治と芸術の緊張関係 / メディア理論—フランクフルト学派からキッターヘ / 西ドイツの戦後文学 / ギュンター・グラス / オーストリア戦後文学—「伝統への回帰」に対抗して / ホロコーストと文学 / ファンタジー小説 / ミヒャエル・エンデ / 東ドイツ文学と検閲 / 文学の受容と流通 / 聴く文学—朗読、ラジオ、オーディオブック / エルフリーデ・イエリネク / 東ドイツ崩壊後の文学 / 多文化社会ドイツの文学 / ラフィク・シャミー—シリアから来たドイツ語詩人 / 探偵小説・ミステリー—主流「文学」との相克

## 第8章 絵画・写真・建築

カロリング期の美術 / 宗教改革と美術—プロテスタントと視覚芸術の関係性 / ウィーン大聖堂 / ケルン大聖堂 / ベルリン博物館群 / ゴットフリート・ゼンパー / ノイシュヴァンシュタイン城とルトヴィヒ2世—バイエルン王の夢の城からドイツ観光のシンボルへ / ユーゲントシュティール / ヴォルプスヴェーデ—芸術家たちの故郷 / オットー・ヴァーグナーのドローイング / ウィーン工房 / ドイツ工作連盟 / ウィーン分離派—クリムトからシーレ、ココシユカまで / アルバー・タウト / 第一次世界大戦とダダイズム誕生 / 闘争の芸術—第一次世界大戦に参加した美術家たち / パウハウス—近代デザインを確立した総合芸術の学校 / 退廃芸術—ナチスと芸術 / ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻—マルチプルという手段 / ドクメンタ / ゲルハルト・リヒター—絵画—イメージの原点を問う / ベツィアー夫妻とその遺産—戦後ドイツ写真の趨勢 / ダニエル・リベスキント / ハンス・ハーケ / 歴史展示とアート / ベルリンのアートシーン

## 第9章 音楽

中世騎士とマイスターの歌 / ビンゲンのヒルデガルト / リート (ドイツ歌曲) / 鍵盤楽器 (クラヴィア) / ドイツ・バロック音楽 / ドイツ教会音楽 / ベートーヴェンと女性 / 日本における「第九」 / ロマン派の音楽—シューベルト、シューマン、ブラームス / 15~18世紀ドイツ語圏の音楽家たちの交流、行き来 / 民謡とナショナリズム / 調性音楽からの脱却—シェンベルク、ベルク、ヴェーベルン / ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 / ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 / ジャーマンメタル / ドイツとオーストリアの国歌

## 第10章 舞台芸術・オペラ・映画

18世紀の演劇—レッシングからシーラーへ / ドラマトゥルク—舞台制作の現場 / インリヒ・フォン・クライストの演劇 / ヴァーグナーとオペラ / モダンダンス、表現舞踊 / ベルトルト・ブレヒトとその受容 / ピナ・バウシュとダンス・テアター / 表現主義映画 / プロパガンダ映画 / 「エーミールと探偵たち」とケストナー / ベルリン映画祭 / 東ドイツの映画とDEFA / ニュージャーマン音楽 / クワイ映画 / オーストリアを舞台にした映画 / ドイツ=トルコ映画 / ドイツ統一後の映画—激動の歴史の中で / ヒトラーを巡る自戒的な笑い—エルンスト・ルビッチからゲッツ・ゲオルグまで / シュリンク「朗読者」と映画「愛を読むひと」—「文字の文化」の物語が映画になるとき / 映画館と野外映画

## 第11章 思想・哲学

キリスト教神秘思想—エックハルト / 万能人ライブニッツ / 啓蒙と永遠平和の理想—カント / リヒテンベルクとアフォリズム / ヘーゲルの弁証法 / 「疎外」とはなにか—マルクス / 「神は死んだ」—ニヒリズムとの対決 / 音楽は言語を超える—ホフマン、ショーペンハウアー、ニーチェ、ヴァーグナー / ヘッケル—エコロジーの起源 / ゲーテの自然科学 / 生の哲学 / マックス・ヴェーバー / 現象学 / フッサールとその後 / 「存在と時間」—ハイデガーの衝撃 / 没落する西洋—シュペングラー / ヴィトゲンシュタイン—論理と論理の哲学者 / 「夜と霧」 / ヤスパーズ、戦争体験、キリスト教 / ハンナ・アレント / カール・ポランニー / 「友と敵」—カール・シュミットの政治思想 / 対話としての解釈学—ガダマー / 公共性—ハーバーマス / リスク社会論—ベック / トーマス・メツィンガー / こども哲学 / シュタイナー教育—芸術としての教育 / 近代の言語思想 / 身体と性格をめぐる「科学」と芸術 / マルクス・ガブリエル

## 付録 / 引用・参考文献 / 事項索引 / 人名索引

## 刊行にあたって

ドイツのメルケル首相がしばしば口にする「文化国民」という概念の基底には、文化が国民を結びつけるという発想がある。かつて文化は特定の高尚な文学・芸術・学問を意味したが、現在ではそれらに加えて、通俗文学、さまざまなジャンルのサブカルチャーからメディア、政治文化、祝祭、儀礼、娯楽、スポーツ、食文化、生活文化に至るまで人々の営みのすべてを幅広く包摂して捉えられている。こうした文化概念の拡大はポストコロニアルな世界的現象であるが、ドイツでは冷戦下の1960年代に盛り上がった文化の民主化を求める若い世代の動きもオルタナティブな文化シーンの登場を促した。さらに域内国境を撤廃したEUの中心国であると同時に、人口の4分の1以上が「移民の背景を有する」といわれるドイツの現実がある。

そのような21世紀のドイツで文化の担い手はいかにあるべきか。ムスリムなど異文化を受け容れ、共生を目指すべきだとする多文化主義の考え方が一方に、他方にドイツには伝統に育まれた独自の文化があり、ここに住む者はそれを尊重しなければならないとする考え方がある。メルケル首相のいう「生き生きとした文化国民」は、この二方向の調和的発展をはかっているかにみえる。すなわちドイツ文化の多様性を前提に、その豊かな歴史的伝統・遺産を引き継ぎながら、ともに新しい創造的文化が開花するよう市民が互いに協力する社会の実現を目指す。そのために世界に開かれた民主的で、分権的な文化行政が重要だというのである。

『ドイツ文化事典』は、こうしたホットな議論を念頭に、先に述べた「拡大した文化概念」の視点からドイツ社会の諸相に光を当てるものである。そこでは多様な文化の成り立ちが歴史的な視点から詳しく解説される。ドイツだけでなく、オーストリアやリヒテンシュタイン、スイスの一部などドイツ語圏全体を視野に取め、いまではドイツ語圏とはいえないが、歴史上そう見なされたことのある中欧諸国の一部やドイツの旧植民地、さらに移住や亡命をキーワードにドイツ語圏と世界・日本との関係にもかなりの紙幅を割いている。項目の選定には網羅的であることよりも事柄の核心的確にアプローチできるよう配慮した。合計300を超える項目が11の章に概ね時系列にそって配置されている。いずれも見開き2頁、2000字程度の読み切りサイズをとっており、どこから読み始めても意外な発見があり、新たな興味が湧いてくるのではないだろうか。

本書を通じて現代ドイツ文化に対する読者の関心と理解がいつそう深まることを期待したい。

2020年7月

編集代表 石田勇治

